

[担当教員]

三輪康一（教授）大西一嘉（准教授）榎橋修（准教授）

寺岡宏治（安井建築設計事務所）

[Teaching Assistant]

加藤駿吾（A65）中川栄里（A65）松田星斗（A65）

## ■課題の概要

現代都市に暮らす人々にとって、子供を産み育てるには様々な課題がある。要因としては核家族化による地縁の希薄化、女性の社会進出による共働き夫婦の増加、単親世帯の増加などが挙げられる。子育ての負担が親に集中することが、都市でのライフスタイルとの間でストレスを生み、育児ノイローゼや幼児虐待といった招かれざる事態の遠因ともなっている。

従来より社会における「発達保障」の場として児童福祉施設は整備されてきているが、現代のような家族観、自然観が多様化する時代において、都市は子供達に、また子供を育てる親たちに、どのような場所を提供すればよいだろうか。本課題では以下に挙げる3つの方向性からひとつを選択し、子供のための空間、都市における福祉のあり方について考えてもらいたい。

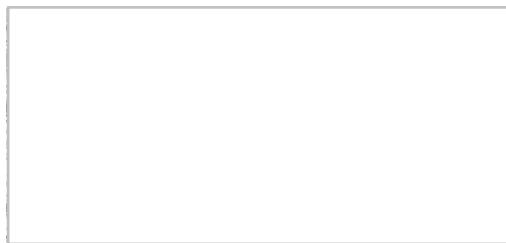
- (1) 次世代をつなぐ児童達が、健やかに育つための支援環境として、自由に利用ができる施設。
- (2) 子育てに関わる様々な人が自由に集まり、交流するための施設。
- (3) 乳幼児の発達保障の場、生活空間を提供する施設。
- (4) 3つの施設が、交差点を中心に子育てスクエアとして一体的な空間をつくるように、それぞれが尊重すべき共通のデザインの方針（デザインシコード）を設定することが望ましい。

## ■敷地

灘区都賀川の河川公園に隣接する敷地で、周辺は住宅地。

・「児童館」敷地①約 2030 m<sup>2</sup>=東西 30m × 南北 70m(変形あり)

- ・「子育てカフェ」敷地②約 1550 m<sup>2</sup>=東西 62m × 南北 25m
- ・「保育所」敷地③約 3100 m<sup>2</sup>=東西 62m × 南北 50m
- ・用途地域等（近隣商業地域 / 建蔽率 80%，容積率 400%，防火地域）



課題敷地

## ■講評会の様子

[OBゲスト講評者]

北聖志氏（THNK一級建築士事務所、AC4）

井上真彦氏（MASAHICO INOUE DESIGN OFFICE、AC11）



## 木立に集う

植田美香

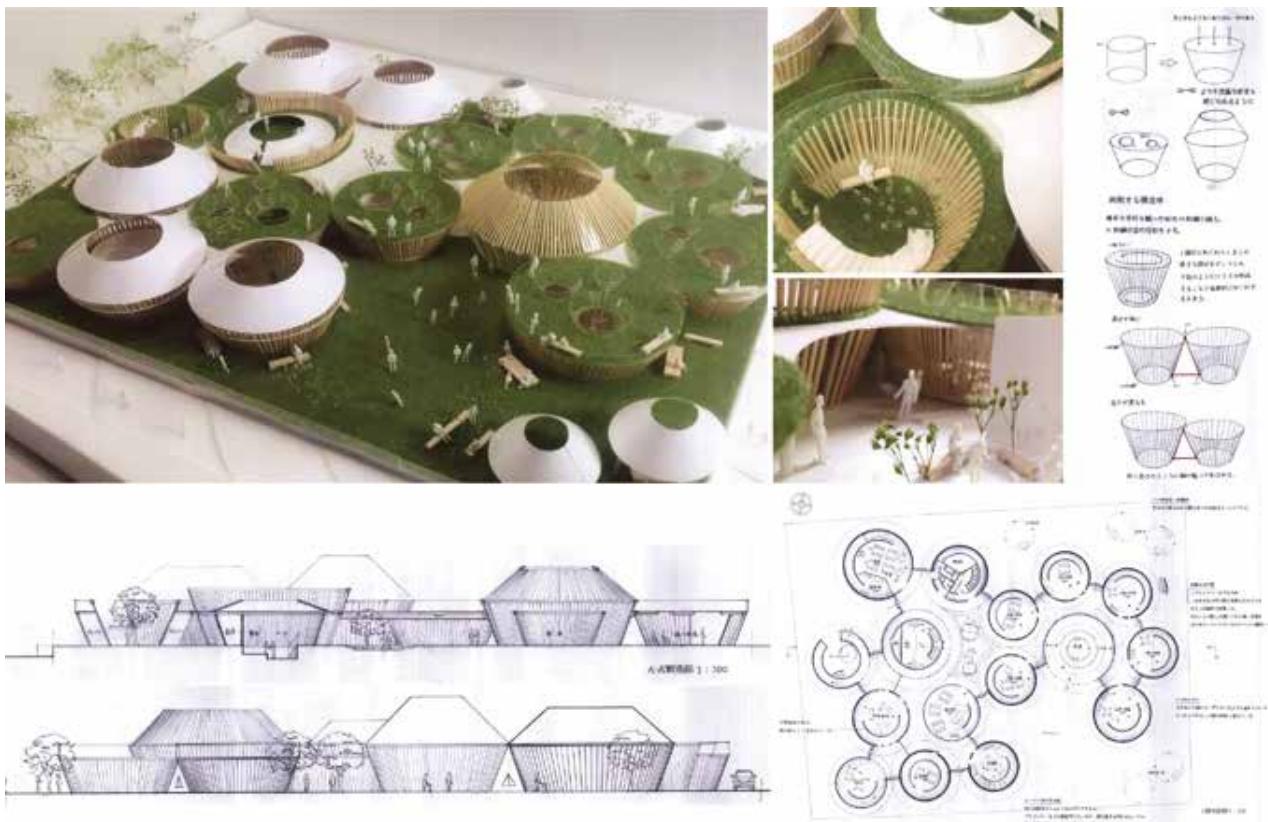
敷地のもつ東西の二面性に合わせ、西側に機能的な空間をおき、東側に木々に囲まれたような自由な“木立空間”をつくる。ソトから周辺の木々や、まちの人との交流の場が介入し、ナカから子供達の賑わいが溢れ出すような児童館を目指した。



## まるい空

大西琴子

建物は太陽の光や空の青を効果的に取り込む形に統一、側面は木のルーバーで、閉じられすぎない印象を与える。中はまるく切り取られた空が天井に浮かぶ空間で、不思議な感覚に陥る。人工的に作られたアートのようだが、同時に自然の力も強く感じる。



## 森に住まう

笠川睦

箱に囲まれた今の生活からどこまでも拡がっていく森の中で遊んでいるような場をイメージした。構造は鉛直荷重を細い無垢の鉄柱と水平荷重を機能が入ったコンクリート柱を持たせることで、内と外の境界を曖昧に。そうすることで遊び場同士が繋がる。



## Terrace in the Forest

中倉俊

柵と柵で囲まれた保育所は閉鎖的に感じられる。スクエア内、地域社会、周辺の自然環境とゆるやかな関わりをもてる保育所を考えた。子供たちが遊ぶルーフテラスは階段状に地面と繋がり、町のオープンスペースを生み出す。テラスのレベル差と、貫入した木々がそれぞれの境界を曖昧にする。



## 壁×庭

横田慎一朗

こどもたちは、日々成長する。壁の向こうにいた、新しい友達との出会い。こどもたちは、日々発見する。入り組んだ壁の先に見つけた、誰も知らない秘密の庭。こどもによって発見され、共に成長していく児童館の提案。

